

会費振込先 みずほ銀行川崎支店東北大学ワンダ-フォーゲルOB会 普通口座(370-1881604)

ホームページ <http://go.to/tuwv>

メールアドレスをお持ちの方は利根川さんに連絡して下さい：GWT00287@biglobe.ne.jp

カラパタール登頂

3期(昭和39年卒) 後藤 龍男

去年のアンナプルナに続き、今秋もヒマラヤに出かけました。メンバーは3期の松木、佐藤、後藤、4期の及川、5期の渋谷、朝倉の、全員還暦過ぎの超高年組です。目的地はクーンブ山群、エベレスト直下に位置するカラパタールです。ピークは標高5541m、エベレスト展望台として有名な場所です。飛行場のあるルクラから徒歩で往復2週間かかる上標高も高いので、ピーク登山を除くトレッキングとしては最もきつい、いわば究極のトレッキングルートです。TUWV以来過去40年の集大成です。

覚悟はしていましたが、最高齢64歳の還暦パーティーにはいささか手応えのある行程でした。こたえたのは何といっても空気の薄さです。昨年アンナプルナは最高地点4200mでしたが、今回はそれより1000m以上高い5500m。カラパタール手前の幕営地ロブチェは標高4900mあり、ここで過ごした二晩は息苦しさでよく眠れませんでした。気温も低く、テントの中で水筒の水がかちかちに凍るほどでした。

しかしながらクーンブ山群の景観は期待に違わず実に素晴らしいものでした。4000mを過ぎ森林限界を超えると、周囲はすべて氷河地形です。次々に現れる巨大なモレーンの向こうにエベレスト、ローツェ、マカルー、チョーオユウなどの8000m峰が次々に顔を出します。6~7000m級のピークは数知れません。カラパタールはクーンブ氷河を隔ててエベレストと対峙する位置にあり、ここから眺めるエベレストとヌプツェは最高です。写真集や絵はがきでよく見かける景色です。エベレスト登頂のアタックキャンプで有名なサウスコルはここまで登らないと見えません。標高5100mの登り口ゴラクシェブから5541mのカラパタールまで標高差450mですが、喘ぎ喘ぎ2時間かかりました。日本国内ならさしずめ小学生のハイキングコースでしょう。

カラパタールから撮った写真を2枚お目にかけます。一度ヒマラヤを見てしまうと、日本の山は言うに及ばず、マッターホルンもアイガーもまるでオモチャに見えます。

我々が出発する直前、東大ワンゲルOB会の還暦組パーティーがルクラの東にある6476mのメラ・ピーク登頂を目指すというニュースが新聞に載りました。トレッキングと違い、冰雪技術を必要とする本格的登山です。よほどトレーニングを積んで出かけたのでしょうか、5500mでふうふう言っている我々にはとても真似できない芸当です。

我々より若いOB諸兄。東大などに負けてはいられません。そろそろOB会でヒマラヤピーク登頂パーティーを出したらいかがでしょうか。例えば今回立ち寄ったイムジャ・コーラという谷の奥にアイランド・ピークという6189mの山があります。シェルパのサダーの話ではアプローチも楽だし技術的にも難しいところはなく、初心者でも容易に登れる山だそうです。近いうちにぜひ挑戦してみてください。



三日月激励(慰問)蓼科山行 (平成16年8月7日8日)

8期(昭和44年卒) 相原 敬

【参加者】 伊藤健一・千代子、前田・教子、水上、小笠原、相原・敬子、(三日月)

八ヶ岳連峰が岩峰群の屏風を連ね、それが北八ツの穏やかな起伏に変わった最北端に、丸い頭を大きく持ち上げた独立峰のように聳えるのがコニーデ火山、蓼科山だ。三日月君は今年の4月からこの蓼科山頂ヒュッテで新たな人生を歩み始めたばかりだ。

蓼科山の登山コースはいくつかあるが、少しでも長く皆と行動したいというもくろみもあって、北横岳を越えて天祥寺原に下る楽しいコース設定をした。ピラタスRWで坪庭までラクチン空中散歩。ガス模様だったが、蓼科山や南八ツがときどき姿を見せてくれるのがいい予兆だ。北横南峰で早速ランチ(L1)になるものの、雷鳴にせかされながら亀甲池に下る。北八ツ特有の鬱蒼とした原生林が予想外に好評で、企画者としてはちょっぴり嬉しくなる。

天祥寺原辺りは花もそこそこ、平坦な草原で軽やかなハイキング気分だ。正面に蓼科山頂が見えるとがぜんやる気になる。取り付きはガレ沢の中を行くが、突然健一が「腹が減った」と騒ぎだし、1時間ほど登ったところでL2になった。將軍平に着くと、ボッカ中の米川氏(山頂ヒュッテオーナー)に出会う。

最後の太岩の急登途中で我慢していた雷様が遂に雨を降らす。小屋に駆け込むと、三日月がはにかんだあの笑顔で歓迎してくれた。まだ2時半半というのに速攻宴会モードに突入し、小屋のビール、担いできた焼酎、日本酒ととどまる所を知らない。雨が止むのを待って山頂逍遥、日没ショーを見に出かける。雨上りのはるかな山並みに感動し、西穂に沈むでっかい夕陽は私達から言葉を奪う。不思議な連帯感が山頂に漂い、若い頃以上にセンチメンタルな気分に入る。

三日月との再会を祝して改めてワインで乾杯する。男3人の山小屋にしては全て手作りの美味しい料理に話も弾んで、山上のなつかしい時がゆるゆると流れていく。ハイシーズンということもあり、30人ほどの泊り客があつて三日月は結構忙しそうに動いていた。食後は善意で提供された個室にもぐり、後片付けを終えた三日月も交えて山小屋の生活ぶりや南極の話で盛り上った。

誰かが便所に起きたついでに、星空鑑賞会とか言って起こされる。月明かりが眩しいくらいだったから、星座はイマイチだった。ウトウトする間もなく御来光の時間がやってくる。雲海に浮かぶ西上州荒船山の真上、雲間からそっと太陽が昇る。雲を染めて派手派手な昨日の日没に比べて、日の出は静かで心が洗われる。展望台に立って、北アから南ア、南八ツに広がる遥かな空間にそれぞれの思いを馳せた。「昔来た時には山頂は草原になっていて走った記憶があるよ」という千代子蓼科山頂翔ける伝説を無理やり納得させられる。

小屋にはピアノや立派な音響装置があり、別れの前に三日月がピアノを2曲弾いてくれた。標高2530mに訥々と流れるメロディーは再会劇を締め括るのに充分すぎるほど穏やかだった。登山者への笑顔、楽しい接客、厨房で甲斐甲斐しく働く姿など、サービスにかかる今の姿が本当の三日月じゃないかと小笠原が呟いたという。

小屋スタッフに見送られて再び山頂に陣取り、コーヒーを沸かす・・・岩間に沈殿・・・OBならではの贅沢さ。ここから女神茶屋まで急な下り、最初は火山岩がゴロゴロした急斜面だが、展望が開けているので気持ち良くおしゃべりしながらの下りだ。

突然の雷雨、ハクサンフウロ、アキノキリンソウ、雨上がりの山並み、西穂に沈む夕陽、祝宴、クラシック音楽、星空、雲海の御来光、360°の展望、まどろむ山頂・・・5月に蓼科山で偶然三日月君と出会い、こんなに早くみんなと訪ねて来られるとは思っていなかった。三日月君、ビールとワインと笑顔とピアノ ありがとう。



(8期の三日月君はこの4月から蓼科山頂ヒュッテの住人になりました。北八ヶ岳に行く時はぜひ蓼科山にも足を伸ばし、声をかけてください)

8期と9期（数回目の）30周年山行～西吾妻岳

8期（昭和44年卒） 前田 吉彦

今年の数回目の30周年山行には参加者が8期と9期合わせて18人。夫婦連や友達を誘ったり、娘さんが付き合ってくれた幸せ者など、これは“おとなの山行”である。

集合は郡山駅、9月4日昼前。ここで数台の車が、はるばる名古屋から来てくれた片野父娘と初参加の川田君の新幹線組みを Pick up。川田君とは実に30何年ぶりだ。今は十和田市で大きな農園を息子さん達と経営している由。今年は娘さんがイギリスから戻ってこないの、参加を渋っていた濱もケンチョが連れてきてくれた。濱あつての同期山行だ。皆で歓迎する。

夏の名残を湛えた桧原湖湖畔で休憩。仙台から猫魔ヶ岳登山を終えた中里さんとお友達もここで合流。「最近、毎週ではないが、月4回ほどは山に行っている」という相原K2夫婦は、磐梯山登山後、別行動で白布温泉を目差す。

白布温泉からはゴンドラで西吾妻中腹の宿「アルプ天元台」へ。山の色合いも盛夏の勢いを失い、季節の移ろいを感じられる。ここからリフトが山頂方向に伸びている。

夕食までの間、温泉に入ったり、持参の肴で一杯やったり。富川奥の特製手作りパンも披露された。窓から見える対岸は、かつて皆で汗した登山道のある尾根だ。本当にしんどい登りだったな。夕闇に加え、小雨も混じってきた。

夕食は誠に豪華。ケンチョが予約した米沢牛ステーキと鍋ものの2卓に分かれて会食。話しが弾むに従い、当然のごとく桃谷氏の一人舞台となる。今年は夫婦で屋久島に登った由。尽きぬ話を切り上げ、雨の音を気にしながら就寝する。外は漆黒の闇。

残念ながら、翌朝も小雨。ガスはかかっているないので、そこそこに見通しは利く。“おとなの山行”なので、決して歩いて登ったりはしない。ペアリフト3本を乗り継ぐが、雨のリフトはやや辛いものがある。それでも足元にはリンドウなどの秋の花が、静かに慰めてくれる。

いつものように露払いには桃谷君、皆で濱をサポートする。ここで頼りになるのは、テニスで鍛えているケンと常に無口で我慢強い原田君。昔の猛者川田君はボストンバックに革靴の超軽装。一方片野君のリュックはやけに大きい。樹林帯の急坂を登ると、カモシカ展望台のガレ場に着く。ここから傾斜も緩み、程なく草原や池塘が現われ、木道に変わる。人形石への分岐を過ぎると、大凹湿原の一角に辿り着くが、小雨も残り、風がやや強く寒い。

雲間に中吾妻を遠望しつつ、オオシラビソと背の低い熊笹を処々に配した、秋色の湿原を更に進むと水場に至る。ここは風も無く、一本とする。この先、西吾妻の登りは岩がゴロゴロの道で、ワングルの現役には向いているが、“おとなの山行”には不向きである。それでも足自慢の者は、この先の梵天岩まで行くこととし、他はここで停滞。雨も止み、コーヒーも沸き、みんなで持参のおやつを出し合い、“おとなの山行”にふさわしい、ゆったりとした時間が好ましい。小一時間で、足自慢隊も帰着する。

戻り道では穏やかな西吾妻山頂も姿を現し、カモシカ展望台では北の展望が開け、眼下に米沢平野、遠く飯豊、朝日、月山、蔵王などの眺望を楽しみながら昼食。再びゆったりした時を過ごす。リフト乗り場では、人形岩へ遠回りをしてきた中里さんとお友達が待っていてくれた。

冷えた体を温めたくて、急ぎゴンドラで白布温泉に降りる。現役時代には無縁であった山の温泉に、皆でとっぷり浸かり、心身ともにゆったりとくつろぐ。

奥さん方も、片野君の娘さんもよく来てくれた。今回はあまり天候には恵まれなかったけれど、これに懲りずまた来てくれることを願う。



平ヶ岳らくらく山行記

26期（昭和62年卒）平田 恭史

日本百名山「平ヶ岳」 二年の秋合宿で御池の国民宿舎経由で会津駒～尾瀬ルートを辿った私にとって、遠方に光り輝いていた平ヶ岳は気になる存在ではあった。しかし、台倉山の稜線を延々と登っていかないとならない平ヶ岳はまあ、一生行く事は無いであろう存在であった。

話は2年前の同期会山行後の宴会まで遡る。「来年の同期会どの山にする？」との話に、だれかが「知ってるか？ 平ヶ岳にチョンボ道があって、楽勝で登れるらしいぞ」との一言。これで03年は平ヶ岳に即決定。登山道の取付きまでの林道は一般車進入禁止、銀山平の伝の助小屋に宿泊し、小屋の車で送って貰ってもらわなくてはならない。03年はメンバーの都合の良い日に伝の助小屋が満員で予約できず、断念。今年こそはと、とつとと予約をし、2年越しの山行が実施される事になった。

梅雨明けの7月31日昼過ぎ、越後湯沢駅に平田・伊田・森・北村の4人が集合。14時奥只見湖畔の銀山平に到着。な一んもする事がないので、だれも乗っていない奥只見湖の遊覧船に乗り、船から平ヶ岳を遠望し、ビールを飲みながら明日への決意をする。

8月1日、ど晴れ。4時に小屋のランドクルーザーで出発、約1時間で取付きに到着。我々の他は、単独行の人2人と日本百名山ツアーのマイクロバス1台分。北村の口から「今日は雨が絶対に降らないので、カップはいらないだろう。」と、とても元ワングルだったとは思えない山をなめ切った発言が飛び出す。他の3人から一斉砲火を浴び、しぶしぶザックにしまう。

13時に迎えに来てもらう約束をして、早速尾根に取り付く。いきなりの急登に運動不足の体から大量の汗が吹き出る。それでも、トップに行くベテランクライマーの平田氏のグッドなペース配分のおかげで小バデ程度でドバデにならず、途中2回の一本で7:45には早くも平ヶ岳稜線の玉子石分岐に到着。個人的には、「玉子石と言ってもどーせ小さい円い石があるだけだろう」からパスして山頂に行きたかったが、ここで北村が玉子石に異様な執念を見せ、行くハメになってしまう。約5分で到着。やっぱり円い石が平べったい石の上に乗ったように見えるだけであった。（でも、天然記念物だそう、後でインターネットをいろいろ見てみると、皆さん絶賛していた）で、写真を2～3枚撮ってそそくさと出発。20分ほどで山頂着。ガスっていて眺望はゼロ・風はビュービュー。まるでただの冬の荒れた草原のよう。でもこのまま下ると、10時には下山してしまうので、1時間程、風を避ける事ができる、周辺がヤブで見通しが全くきかない一等三角点の周辺でお昼寝を敢行。このとき、ふっと気が付くと北村は登り口で「置いていく」とのたまっていたカップを着込んでいた。

その後、たらたらした稜線を25分程だらだら歩いて池ノ岳山頂に到着。平ヶ岳山頂より、数倍こっちの姫ノ池をはじめとした高層湿原がきれいであった。で、ここでも木道の上で30分のお昼寝実施。

10時半過ぎ、ガスが晴れる気配も無いし、寝てばかりいて体も冷えてきたので、やっと下山開始。登りと違って、重力に身を任せる下りはいつもながら早い。途中の15分程度の一本を含めて1時間20分程度で下山完了。12時には登山口に到着した。ここで、小屋の人が沢水で冷やしておいてくれたビールで乾杯。このルート of 登山道はしっかりしていて、迷うところは無し。

この日は、枝折峠で魚沼駒ヶ岳を眺めて一年の秋合宿でバテた苦い思い出を噛み締めた後、折立温泉「湯元 大鼻旅館」に行く。そこでマージャンだけをしに東京から来た佐藤と合流。温泉と地元の素朴な料理、それと「持ち込み」の酒を満喫して、今年の同期会を終了した。



玉子石の前で

（昭和41年の夏合宿、玉子石の上に寝転んで「恋の肢(?) それとも中の肢(?)」を遡行してくるパーティーを待ち続けた思い出がある：8期 佐藤）

南インドのチェンナイから

4期（昭和40年卒） 小原 佑一

南インドのチェンナイ、英領時代のマドラスという名称の方を知っている人が多いでしょう。縁あって、そこで生活を始めて1年が過ぎました。

日本でインドといえば、北インドです。南インドのことはめったに聞きません。北にはどっかりとヒマラヤ山脈がひかえています。南には2500mを超える山がいくつかある程度です。

チェンナイはベンガル湾に面した港町で郊外に小さな丘はありますが山らしい姿をみる機会はありません。しかし、現役時代味わった山の生活の雰囲気はそこかしこにあります。

まず、夜になると、歩道の上、広場などいたところで「オカン(野宿)」をしています。それが彼らの生活なのです。家族で川の字になって寝ている光景をよく見ます。中にはテントならぬ「蚊帳」を張っている人もいます。夜中でも暑いので外で寝る方が寝やすいのも理由の一つかもしれません。しかし彼らは「ハウスレス」なのです。（家族があるから「ホームレス」ではないと勝手に定義）

山と違い寝袋ではなく、たいてい頭から布を一枚かぶっています。多分、蚊除けだと思います。何しろ市内でもマラリヤ、デング熱、日本脳炎、その他いっぱい蚊が媒介する病気があります。

このような人たちは朝起きると、「キジウチ」にそこらの広場や、河原、海岸に行きます。道路の脇にでも... 最近では、共同トイレも出来てきました。後始末は紙を使わず、左手を使ってペットボトルの水で清めます。

ヤシの葉で編んだシートを使った小屋に住んでいる人たちもいます。穴を掘っていないので堅穴式住居ではありませんが似たようなものです。昔、本部テントに使っていた10テン位の大きさです。そこに住んで、家財道具も収納しています。そこらの石を積んでかまどを作り、薪で炊事をしています。まるっきり山での生活と同じです。

インドとは人口の1/3近くがこのような生活している国です。

まだまだ毎日新しい発見です。そんな生活してみないと分からない情報、特に食に関して、写真を使った「インドの食」という情報発信を行っています。是非、下記のURLにアクセスして見てください。質問、コメント、ご要望、なんでも結構です、ゲストブックやメールに書き込んで下さい。



- No. 1 お祝いの食事 : <http://www.photohighway.co.jp/AlbumPage.asp?un=3836&key=1521350&m=0>
- No. 2 朝食 : <http://www.photohighway.co.jp/AlbumPage.asp?un=3836&key=1522167&m=0>
- No. 3 街道脇のドライブイン : <http://www.photohighway.co.jp/AlbumPage.asp?un=3836&key=1526870&m=0>
- No. 4 ダイエット : <http://www.photohighway.co.jp/AlbumPage.asp?un=3836&key=1531725&m=0>
- No. 5 かつお : <http://www.photohighway.co.jp/AlbumPage.asp?un=3836&key=1539673&m=0>
- (No.6からNo.12までは現在引越し作業中です)
- No.13 料理の専門家2 : <http://www.photohighway.co.jp/AlbumPage.asp?un=3836&key=1518486&m=0>
- No.14 お酒 : <http://www.photohighway.co.jp/AlbumPage.asp?un=3836&key=1527315&m=0>
- No.15 鍋・釜・かまど : <http://www.photohighway.co.jp/AlbumPage.asp?un=3836&key=1543644&m=0>

Yannick Yuichi O' HARA/小原佑一/大東馨司

E-mail: yuichi_ohara@che.ajinomoto.com, yyohara@c3-net.ne.jp, yyohara@ca.mbn.or.jp, yannick_y_ohara@yahoo.co.jp, yyohara@vsnl.net

URL: <http://www1.c3-net.ne.jp/yannick/index.html>

北岳バットレス第4尾根クライミング

8期(昭和44年卒) 佐藤 拓哉・良子(タック&オギヤー)

27期の平塚晶人君の著書「二人のアキラ、美枝子の山」で描かれている松濤明が初登攀し、奥山章が冬季初登攀した中央稜は、ガスの中、バットレスCガリーの奥に不気味にそそり立っている。

「どうする?」、「ここから戻って、明日また登り返すのもイヤね」、「抜けられなかったら壁の途中でビバークでもいいか?」……下部岩壁にたどり着いた時の会話である。マイカー規制のため、広河原でバスを降りたのは8時過ぎ、それから延々と大樺沢を登り、バテバテで下部岩壁(Bガリー)に着いたのはもう昼過ぎであった。とにかく登れるところまで登ることにする。

オギヤーのリードでBガリー大滝右側の茶色のフェースに走っているクラックから取付く。2ピッチでBガリーの岩場を抜け、草付帯の踏み跡を暖傾斜帯まで登り、水平の踏み跡を辿ってCガリーに出る。岩屑がガラガラしているCガリーの奥にはかの中央稜が見える。

第4尾根取付きに着いたのは15時少し前、これならなんとかかなるような気がして元気が出る。1ピッチ目はルートの核心部の一つであり、オギヤーのリードで正面のクラックから取り付く。最初のピンがちょっと遠いので、念のためフレンズをセットする。その後は3ピッチほど簡単なスラブを登ると、第2の核心部、数mの垂壁となる。クラックを掴みながら三角形の傾斜のきついフェースをバランスよく登る。垂壁を登った後、高度感抜群のリッジを辿るとマッチ箱のピークとなる。まだ17時前、これならなんとか抜けることができそうと、ホッとする。

マッチ箱のピークからDガリー側に10mほど懸垂下降する。ガスでよく見えないが、左側にDガリー奥壁の赤っぽい色の見事なスラブが広がっており、登攀意欲を誘う。マッチ箱側の凹角から登り始め、スラブからリッジに出る。途中でルートは二つに分かれるが、オギヤーは右の難しいルートを登り続けた。登ったのはいいが、枯れ木テラスまでは届かず、途中の岩にスリングを回してビレイしている。

狭い枯れ木テラスから右下に少し下ったところに、中央稜へ向かうための懸垂支点が見える。無気味なところである。枯れ木テラスからはDガリー奥壁右端のバルジを越え、簡単なスラブを登って終了点となる。18時、どうにかヘッドランプなしに登ることができたが、暗闇が迫ってきている。

ヘッドランプを頼りに踏み跡を辿って縦走路に出た途端、西風が吹きつける。濃いガスの中、磁石で北の方角を確認し、とにかく登れるところを登っていくと、急に「北岳3192m」の標識にぶつかる。「とにかく辿り着いた」という安堵感が湧いてくる。

頂上から肩の小屋への岩尾根のルートはまったく分からない。ヘッドランプで見えるのは白いガスばかりで、岩の向う側がみんな断崖のように見えてしまい、苦勞する。1時間ほどで諦め、フリースと雨具を着込み、ツェルトを被って岩陰でビバークする。夜半から雨模様となる。翌朝見たら、ビバーク地点は縦走路の上であった。小屋の手前15文、時間はかかったが、正確に下りてきたようだ。小屋の熱いうどんがやけに美味かった。



1P目をリードするオギヤー

ささき農園だより

20期（昭和56年卒） 佐々木 晃

野菜農家に転身して4年、多少は腕が上がったと思っていたのですが、今年は猛暑・台風・秋の長雨と、天候に泣かされました。契約しているお客様に、定期的に旬の野菜の詰め合わせセット（8～10種の野菜が入る）をお届けしているのですが、肝心の野菜が揃わずに、たびたびお休みする始末で、当然売上も無くなります。せつかく新規の申し込みがあってもお断りせざるを得ません。幸い、お客様のご理解と応援があつて、くじけることなく過ごせました。

農業は、春になれば前年の結果は良くも悪くもリセットされ、1からやり直せるので、来年こそは!! 量販店には無い、手作りの新鮮野菜をお求めの方、「野菜はどうでも一丁応援してやるか」と思われた方は、一度ご連絡ください。



(写真①) 2月：踏み込み温床。古畳で作った枠の中に、落ち葉と米ぬかを混ぜながら水を撒き、踏み固めると、数日で醗酵が始まり、発熱してくる。この落ち葉の上で、ナスなどの夏野菜を発芽させます。江戸時代からあるバイオテクノロジー（しかもローテク）で、いかにも有機農業らしいでしょう？

写真②) 4月：春夏野菜の育苗。トマト・ピーマン・トウモロコシ・キュウリ・オクラ・インゲンその他で3千株以上あるでしょう。ここまでは順調で、GW明けを待って次々に定植したのですが・・・

(写真③) 6月：21日の台風6号で、実が着きだしたばかりのトマトハウスが潰される。写真②の育苗用ハウス、しいたけ用のハウスも倒壊。被害総額は50万円以上で、零細農家にとっては大打撃です。

写真④) 11月：どうにか気力も回復、潰れたハウスをやっと片付け、その跡を耕運しているところ。トラクター作業が一番楽チンです。奥にあるのは収穫中の大根。おいしいですよ。

ささき農園／佐々木晃（日本有機農業研究会会員） 〒300-4414 茨城県真壁郡真壁町椎尾1724

Tel&Fax 0296-23-9768

Eメール akira00@jeans.ocn.ne.jp

大東岳で戴山スキー

33期（平成5年卒） 日野 淳一

ここ4年ほど、OB数名で「ジャンプターンズ」なるものを結成し、冬は山スキー三昧の日々を送っている。今年2月28～29日に樋の沢小屋泊で、南面白山と大東岳を滑ってきた。メンバーは、33期の小野寺、河野、日野と34期の大澤、関口の5人。

仙台在住の自分は余裕の8時起床で出発。熊ヶ根駅で東京組と合流し、兼用靴をがちゃがちゃ鳴らしながら電車に乗りこむ。11時30分頃面白山高原駅着。週末だということにあまりの客の少なさに呆然。わずかなスキーヤーもじいさんばかり。ここ10年でスキーはシニアスポーツになったらしい。リフトを乗り継ぎスキー場上へ。先日までの寒気で霧氷をまとったブナ林に入る（12:30）。なつかしさのあまり、夏道はあそこだ、トラバースはここだと言いながら進む。夏道沿いにトラバースし、西面の広い沢筋に入る。ここはなだれの起きやすい場所として知られており、2月だということに既にデブリが見える。かなりの急登なので板を外して登る。次第に樹木がまばらになり、ひょっこり頂上に出た（14:00）。高曇りだが見通しはよく、間近に猿鼻が真白い斜面を見せている。低気圧が接近し、明日は天気が崩れるのが確実なので、今日中に大東に登ろうと言いつつ滑降開始。ピークの東面は絶妙な新雪斜面で十分に滑りを楽しめる。更に樋の沢に向かって滑りこんでいった河野が歓声を上げている。樋の沢源頭部は二口とは思えない大斜面になっていた。すこし重いが、全く期待していなかった新雪の斜面を存分に楽しむ。15:00頃、樋の沢C900付近の二股上部に至る。ここに荷物をデポし、空身で大東岳を目指す。

大東に突き上げる尾根を辿っていくと、やがて背丈の低い灌木帯になる。ところどころ疎らなところもあり、下りはここを繋いで下るしかなさそうである。17:00過ぎに頂上着。タイミングよく晴れ上がり、頂上の雪原が夕陽で朱色に染まっていた。山形と仙台360度の展望をしばし楽しむ。

日没が近いので滑降開始。西面の頂上直下は腰までのすさまじい盆栽ヤブだが、やがて急峻な密樹林帯に入る。アイスパーン交じりの急斜面を横滑りとジャンプターンでやり過ごし、やがて登路の尾根へトラバース。ここからは狭い樹間をぬいながら、デポ地点まで滑り込む。既に17:30、辺りは薄暗く、小屋へ急ぐ。水流は埋まっておらず、左岸をトラバースしていく。18時を過ぎるとすっかり日が暮れ、月明かりを頼りにスキーを延々と滑らせる。河野が「小屋通りすぎたんじゃねえか？」と心配し始めたころようやく樋の沢小屋着（18:15）。積雪は少なく1階から入る。2階に上がるとなんと布団まである。快適小屋でようやく宴会開始。大澤の強い希望により、ビール+牡蠣入り海鮮キムチ鍋。欲張って水を入れすぎ薄味となるも勢いで平らげる。何故か20時を過ぎて、若いアメリカ人らしきスノーシュー3人組が到着、マイナーな避難小屋は以外にも満員となった。

翌朝は6:30に出発。樋の沢の右岸を辿る。昨日のトレース沿いに登り、10:15頂上着。かなり雪は重くなっているが、最後の滑りである。100mも下ると雪質はザブザブの湿雪になり、密な樹林と合わせて手ごわいが、まもなく広い沢筋にでる。デブリをよけつつ滑り、最後は夏道沿いにトラバースしてスキー場に飛び出す（11:10）。今や倒産寸前かと思われるガラガラのゲレンデを流し、ホームに滑りこんで終了。帰りは秋保の日帰り温泉を楽しみ、すっかりファミレス風になった「めしのはんだや」で反省会。

今回は、なつかしさだけで滑りにはたいした期待もしていなかったが、思わぬ再発見に恵まれた。大斜面の滑降は無論楽しいが、樹林の中でぽっかり白い斜面を見つける喜びも捨てがたいものである。



新雪の大滑降（上）と、夕暮れ迫る大東岳頂上（下）

21期、22期黒部源流山行

21期（昭和57年卒） 千田 敏之

2年前の夏、日高の沢山行を大雨で観光旅行に変更せざるを得なかった21期、22期の合同パーティーは、その雪辱戦の意味も込めて、2004年夏は黒部の山旅を行った。メンバーは21期は富士原、千田、22期は石川、土屋、手塚。沢のプレ山行も奥多摩で2度行い、準備万端で黒部に向かった。

出発は8月5日、夜行列車で富山へ、富山からバスで折立へ。太郎平まで登り、薬師沢出合いに向かい下降。この日のテン場は薬師沢左俣、右俣の合流点。幕営禁止地域だがこっそりテントを張る。釣った岩魚を焚き火で焼いて酒を酌み交わす。これこそ沢の醍醐味。

2日目は黒部本流に入り、赤木沢までまず遡行。当初の予定は赤木沢出合い近く、ウサギ平で泊まる予定だったが、「歩き足りない」「釣りは飽きた」というわがままなメンバー多く、この日のうちに赤木沢をやっつけ、黒部五郎のテン場までいくことにする。これが“苦行”の始まり。日本有数の美湫とツメの赤木平の草原を堪能したまではよかったが、そこから黒部五郎までが実に3時間近くかかる縦走路。テン場に着いたのは夜7時過ぎであった。

3日目も「双六から小池新道はつまらん」との声が大勢を占めたため、当初の計画を取りやめ、無謀なルートを選んだ。三俣蓮華から、鷲羽、水晶を経て、「長さ」で悪名高き竹村新道を湯俣に下山することにしたのだ。この日も実働で10時間以上になりそうだが、出発時は皆、やる気満々だった。しかし、水晶を午後1時に通過した頃から、遠くで雷鳴が聞こえ始め雨もポツリポツリ。明るいうちにテン場に着こうと学生時代のようにほとんど休憩することなく下り続けた。結局、湯俣には日没直前の6時過ぎに到着。さすがにこの日はテントはやめて、温泉付き「晴嵐荘」泊をおごった。

中年男のわがままから、2日続けて12時間以上の行動となった。この年齢での体力の限界（ちなみにザックは17キロ前後）を実感することと相成った。2005年はもっと快適で楽な、大人の山行にしたい。

（追記・12月3日の反省会で、来年の合宿が平ヶ岳に決まった。ルートは水長沢か恋ノ岐川の予定）



いかがお過ごしですか？

22期（昭和58年卒）の利根川敏です。（メールアドレスの連絡は GWT00287@biglobe.ne.jp）
年賀状や同期会でメールアドレスを発見された方、間違いに気付かれた方は利根川までご連絡下さい。

仙台へ転勤して3年目、家族が合流して2回目の年末をむかえました。山登りからはほとんど縁がなくなり、子供と泉ヶ岳へハイキングが精一杯です。ヒマラヤのトレッキングに挑戦されている諸先輩に比べると、TUWVのOBとしては失格かもしれません。その分「山岳」では無く「産学」連携で、母校である東北大学と自社（NECトーキン、旧東北金属工業）の橋渡し役を務めています。現在は大学との産学連携や研究開発戦略の策定など、全社研究企画としての仕事に従事しています。

NECに入社して20年の節目を迎え、現在出向しているNECトーキンに移籍予定です。宮城県、仙台市、東北大学など仙台をベースにした業務が多くなります。研究企画としての仕事の関係から東京出張も多く、月4、5回は新幹線に乗っています。新年会にはうまく東京出張が入る（入れる？）ことを期待しています。

OB/OGの電子メール管理人（自称）を務め早くも7年目、判明した電子メールアドレスは258名、概ね半分の方々です。電子メールアドレスは比較的頻繁に変わるもので、250名以上に一斉配信をすると、毎回15件前後の宛先不明のメールが戻ってきます。この時ばかりは「くじけそう」になりますが、皆様から「懐しく当時を思い出し名簿を拝見しました…」といったお返事をいただくことも多く、「OB/OG全員が1本のザイルでつながるまで…」細く長く名簿整理を進めてゆく予定です。

e-mail整理の歴史と今後の対応

Phase-1:利根川の卒業期前後の探索 (1998年以前)

Phase-2: 新年会、OB会報での呼びかけ (98年～04年)

Phase-3: 当方からのヒアリング (05年～) (予定)

→ 2007年ころ (10年目) 全OB/OGのe-mail探索終了、WEBへの自動登録 (自己管理を目標)

→ 現役/OB&OGが同じネットワークでつながり

7期 (昭和43年卒) の真尾征雄です。

小生 今年4月でめでたく還暦を迎えました。4月末に鹿島建設を定年退職しましたが、さらに鹿島のために働くようにと話しがあり、再雇用契約を結びました。

1年程前に、定年後のことを考えて、会社以外の付合いを広げようと思い、「男子厨房に入る会」に入会しました。講師の先生の説明の後、ワイワイ言いながら料理を作る。出来た料理を肴に一杯飲む。名刺交換不要の付合いていいものですね。肩の力も抜けて、料理もうまい、最高です。和食・洋食・中華・蕎麦打ちと腕を磨いています。

仙台に「終のすみか」を免振構造で新築しました。遊びにおいでください。私の手料理でおもてなしいたします。

7期 (昭和43年卒) の金子清敏です。

中国へ通い始めて8年が経ちました。高校1年の時に教わった楊貴妃なる小説の中で、玄宗皇帝が三千の寵愛を一身に集め、凝脂を洗うとかの一節に引かれ、また浪人時代には予備校の漢文の先生から、中国はこれから偉大な国になると吹聴されたこともあり、さらに元々は医者に進む道を求めていることで、いつの日か行きたい処と考えていました。

ようやく仕事にかこつけて中国大地を踏むことができました。しかし、その食文化にはなかなか馴染めず、スッポン、蛇、鰻、虫けら、犬等は、豚、羊、牛、鳥の香料含んだ肉とともに未だ嗜好に合いません。高価な魚のその美味しい白身も香采の強い香に箸がすすまず、所詮海と川と沼の混合した異国食物と考えてしまうことでした。

この夏には、好きな生牡蛎を恐る恐る少々食して帰国したところ、その48H後には新幹線並みの下痢にであってしまい、偉い医療費が掛かりました。安い店はもちろん、ホテル、高級料理店も厨房のひどさはそれを見たものでしか想像つかないものです。見た目には綺麗な野菜、フルーツも、洗いの汚さは厨房を知らなければ、そのやさしい味には誰もNOとは言えません。生物には熱を通せばよいかと思いますが、所詮、箸、テーブル、トイレ、お札には雑菌がうようよ生きて遊んでいます。

昨年はサーズが退くころに訪中し、その結果若干の病気もちの先輩は1ヶ月後には胸の病気で入院し、10ヶ月過ぎには亡くなりました。小生も帰国2ヶ月は咳、タンに悩まされましたが、熱が無いとのことではサーズに認定されませんでした。

最近、カラオケ店 (風俗バー) で日本人も捕まりました。淋病と梅毒を合わせた”かりん”という性病も旺盛です。

中国の女性は、上海系は京美人、北京系は東京人です。やさしい心を持っていますから、花を育てる気持ちで接してください。思うまにまにつづりました。

8期 (昭和44年卒) の濱聰です。

ご無沙汰しています。最近ますます体調不良で、外出するのが億劫になってきました。と言っても給料をもらうためには毎日出かけなければなりません。朝は6時半頃のバスに乗り、帰りは6時頃です。定年まであと2年、がんばらなくちゃ。

先月の朝方、転んで柱の角に頭をぶつけ、“大量”出血をし、近所の病院に運ばれました。新発見、“最近では傷を止めるのはホッチキスだ!” それ以後は帽子をかぶるようにしています。「豆腐の角」だったら笑い話になるのだけどネ。脳外科にかかったついでに別件の検査をしてもらったが、その件は問題がなかったので一安心。

脳腫瘍については、「脳腫瘍ならせいぜい5年しかもたない。多分、海綿状脳症、じゃなかった海綿状血管腫だろう」というご託宣で、24年前は「誤診」だったようです。景気の悪い話ばかりで相すみません。皆様のご活躍に期待しております。

1 2期（昭和48年卒）の神山文範です。

ロンドン駐在時代（1982－6）にお世話になった英国人のご夫妻が、10月に日本の山に我が家と一緒に登りたいと連絡があり、春から我が家は大騒ぎでした。

雨が降ったら戦場ヶ原を案内が出来ると考えて、我が地元の日光白根に登ることにしたのですが、今年の秋は台風も多く、いろいろ心配が募る中、10月11日に来日。13日には盛岡から娘が帰ってきて、14日6時発でご夫妻と我が家3人で日光に入り、雨の中を東照宮など案内。明日は天候が回復するとのテレビの予報を今度こそは当たれと（この辺りは天気予報が外れまくっていたので）寝ました。

翌朝、明るい日差しに早起きして、持ち込んだシリアルとミルクで朝食をとり、6時30分に出発したところ、なんと金精峠は初雪に輝いていました。菅沼登山口から初雪が2－3センチ積もる中、弥陀ヶ池を経由して奥白根に登りました。

海老の尻尾を「We say this tail of lobster」などと英語を話しながら、吹雪の頂上で記念写真と昼食を取っていたところ、突然青空が広がり、ご夫妻も感激。帰りは五色沼経由で、弥陀ヶ池からは同じ道を帰りましたが、全く幸運な日英親善の山行でした。

補足1：利根川君からメルアドの連絡あり、1年後輩の岡部君がメールを入れてきたので、この白根山行も紹介しながらメルアド登録を紹介したところ、何と彼はその前の週に奥白根に登ったとか。

補足2：娘が来春からトンペイの生命科学研究科に進学することになり、また仙台が近くなりました。

1 9期（昭和55年卒）の小山茂典です。

昨年11月末、14年暮らしたアメリカから帰国し、ちょうど1年になりました。俗に、長い外国暮らしから戻ると逆カルチャーショックもあり、海外駐在1年につき1ヶ月のアジャスト期間が必要と言われていそうです。

その理屈（根拠レスですが）から言えば、当方の場合慣れるのに1年以上かかる計算です。確かに最近ようやく落ち着いてきたような気もしますが、それでもいささかなじめぬことが色々あります。この1年で感じた個人的な小さな不思議発見をいくつか。

＊物価高；東京のスーパーで食料品の価格を見ると、やっぱり高いがまあこんなものかなと一瞬思います。しかしよく見ると、例えば同じアスパラ一束でも日本は6,7本とバラで数えられる程度、アメリカはその10倍はあり両手で持つもの。肉類は日本の100グラム単位とアメリカのパウンド(約450グラム)単位でようやくいい勝負。果物に至ってはどれも芸術品のごとく美しく美味しいのは認めるが、1個と1ケースぐらいは価格差あり。我が家のエンゲル係数は確実に3倍以上になる不思議。

＊電車；長い間車で15分くらいの通勤だったので、満員電車での通勤は最大のストレス。エスカレータの左側は立つ人、右側は歩く人（関西はこの逆）など、どこにも書いてない暗黙のルールで大量の人間が流れて行く様子は驚き。

驚きと言えば女子高生のスカートの短さは何だ?! いつの間にこのようなファッションになったのでしょうか。冬に上はマフラーやセーターで着ぶくれ、下は素足というアンバランスに納得できず。電車の中での一斉携帯メール親指秒速運動や、衆人環視の中でのお化粧の不思議。

＊テレビ；“ああなるほど”という意味で“へーっ”と言う時、手が上下動して机を軽くたたたくアクションが最初不思議でしょうがありませんでした。やがてテレビの人気番組の影響であることが分かり、“へー”。料理番組やグルメ番組がゴールデンアワーに延々とある不思議。

2 7期（昭和63年卒）の平塚晶人です。

所属している社会人山岳会、徒登山（ととこう）山岳会（都岳連加盟）で、3年前から新人募集担当をしており、この3年間で12名の新人を入会させました。（現在、会員数24名）。私のちょっとした自慢です。いつになっても、山の新しい仲間との出会いはいいものです。

山行は、小田原に住んでいるので、丹沢ほか東京近郊の沢登りを中心にやっています。あと、幕岩が近いので、岩も少し。本チャンは、今年は北岳バットレス・ピラミッドフェースに登りました。

ライター業のほうは、7月に「二人のアキラ、美枝子の山」という本を文藝春秋社より出しました。「風雪のビバーク」で有名な松濤明氏、第二次RCCを創設した奥山章氏の話です。そうそう、それと、来年から私的に地図読みの講習会をやることにしました。ホームページ

<http://www.geocities.jp/chikeizu/> に顛末を載せようと思いますので、覗いてみてください。

最後になりましたが、OBのみなさまの山行が、来年も安全なものであることを願っております。

3 4 期（平成 6 年卒）の平賀岳彦です。

7 月からまた居心地の良いアメリカ・ミネソタに戻りました。マイナス 30 度の冬が迫っています。恒例になった夏のアラスカ山行を今年もできたらと思っています。でも、先週、久しぶりにバトミントンをしたらぎっくり腰になり、情けなさに落ち込んでいます。近くに来た際は、ぜひ知らせてください。

4 2 期（平成 1 5 年卒）の熊野裕介です。

現在、東北大学大学院環境科学研究科で学生（修士2年）をしております。来年はD 課程に進学の予定で、まだまだ仙台でモラトリアムしています。なかなか、忙しくて山に行く機会が作れずにいますが、（いまだに？）時々現役の皆さんに遊んでもらっているような感じです。いつまでたっても快く迎えてくれる後輩をありがたく思う今日この頃です。

冬は山スキーもやるのですが、さすがに今年は修士論文を纏めないといけないのでゲレンデがメインかなと思うとちょっと残念です。でも、今年は現役の1年生に山スキーをやりたい子がたくさんいるらしいので、1度くらいはご一緒したいと勝手に企んでいます。

4 3 期（平成 1 6 年卒）の山下絢子です。

今年からとうとう名誉ある東北大ワングルOBの仲間入りをさせていただきました。現在は修士課程に進学し、生命科学研究科に所属しています。昨年から引き続き「生命素子機能」という研究室で研究活動しています。

修士課程終了後は就職し、離仙することになると思い、今のうちに東北の山を制覇するぞ！とワングルのOB生活にも希望を抱いていましたが、なかなか時間がとれず、結局今年度の山行は、7月に同期+OB 3 年の中川さんで行った「雨の鳥海山」と、恒例となった現役女子部員+OGでの「女の子フリーin吾妻」のみとなってしまいました。いずれも内容はかなり濃かったのも、私的には結構満足です。

ワングル以外では、家族とスイスにトレッキングに参りました。山岳鉄道で何の苦労も無く4000メートル級の山々に登り、自己最高高度を更新してしまいました。このままではワングルの名が廃るので、何とか次回の記録更新は自分の脚で行いたいと思っています。

年々早くなっているとは言いますが、私は既に就職活動が本格化しています。もちろんワングルを前面に押し出した自己アピールをしております。就職活動を機会にワングルについて色々と思い出し、本当に素晴らしい経験ができたこと、先輩や同後輩に対して感謝の気持ちでいっぱいです。製薬・食品企業にお勤めのOBの方には、面接等でお会いすることがあるかもしれません。その際は是非御ひいきに。

来年は本当に仙台最後の年になってしまうので、東北の山々を本気で攻めていこうと思っています。皆さんご一緒にいかがですか？お声をかけますので是非御賛同を。そして何かの際には私のことも誘ってくださると光栄です。宜しくお願いします。

4 3 期（平成 1 6 年卒）の村上匡です。

昨年、ワングルおよび大学を無事卒業し、現在は同大学の大学院に籍を置いて日々学業に勤しんでいる…フリをしています。

OBになっても山には行き続けたいと思い、気心の知れた仲間と月1ペースくらいで山に行っていましたが、今年の夏に町内バドミントン大会でアキレス腱をプツンしてしまい、現在はインドア生活爆進中です。来年の復帰を目指して日々リハビリに励んでおります。インドアなアウトドア派の村上を今後ともよろしく願いいたします。

< 岳人バックナンバー >

平塚晶人さん（27期）：2003年10月号（顔写真入り、インタビュー記事）

佐野 豊さん（19期）：2003年12月号（くりこま山）

2004年1、3、5、7、9、11月号「岳人時評」

佐藤拓哉（8期）：2004年2月号（P74の写真④ アイスクライミング）

新 年 会 の お 知 ら せ

新年会は毎年1月の最終金曜日にいつもの所で行っています。

平成17年1月28日（金） 18：30（会費は10,000円の予定）

新橋駅のすぐ近くにある新橋亭（しんきょうてい）（TEL 03-3580-7811）

お誘いの上ご出席下さい。特に若い人の出席は大歓迎です。遠くの方でも東京に出張などで来るような場合には、ぜひ出席して下さい。飛び込み大歓迎です。逆に、ドタキャンは本当に幹事泣かせ。

予定が変わった時は早めにご連絡下さい。

問い合わせ、連絡先 佐藤拓哉 Tel 046-841-8622 メール: 3354407801@jcom.home.ne.jp

<平成15年新年会出席者>

- (S38) 渡辺勝宏 (S39) 大津満、小俣勝男、
岡好宗、後藤龍男、佐藤敦、松木功
(S40) 及川捷悦、島崎質、関川利男
(S41) 相沢宏保、朝倉肇、佐藤豊治、瀬尾勝之、
八木真介、横山雄一郎
(S43) 石川誠之、大木芳正、金子清敏、国岡徹郎、
菊谷清、手戸雅巳、藤森英和、上田俊郎、山口正雄
(S44) 相原敬、小笠原弘三、佐藤拓哉、浜聡、
水上俊彦、渡辺幸英
(S45) 伊藤千代子、原田博夫、桃谷尚安
(S46) 薄木三生、黒田和雄、菅原英行、杉森一太、
田中康則
(S47) 池田重則 (S48) 神山文範、松井一昭
(S52) 福田義久 (S55) 板橋正之、須々木裕太
(S56) 岡崎幸司、佐々木晃、丸山貴之

以上48名

TUWVOB会 2003年会計報告

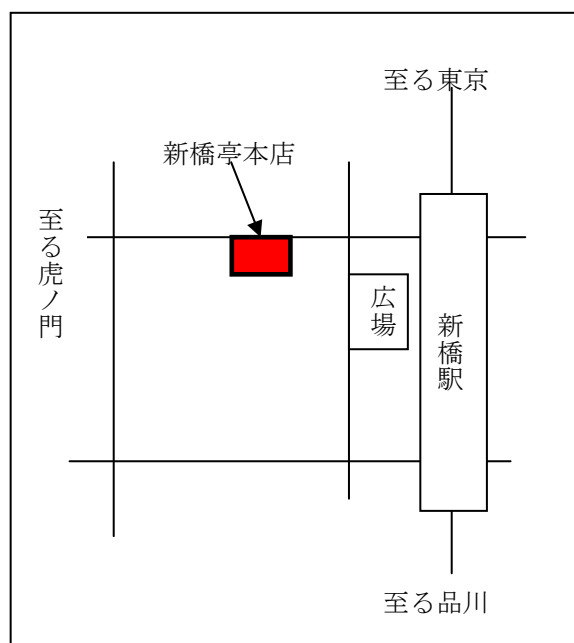
（東京口座）

1. 収 入

前回から繰越	356,266
OB会費（7人）	18,000
利息	2
計	374,268

2. 支 出

会報 印刷	10,500
送料	16,480
香典・送料（2件）	16,386
封筒	1,801
事務用品、通信	833
次回繰越	328,268
計	374,268



★★ 編 集 後 記 ★★

☆ OB会員に不幸があった場合、OB会として次のように対応しています。

- ① 本人または配偶者に不幸があった場合はOB会として対応する。
- ② 葬儀に間に合う場合は同期の誰かがOB会名で生花を出す。費用は後日事務局に請求する。
- ③ 葬儀に間に合わなくて後日同期の方が線香をあげに行く場合は、OB会名の香典（本人の場合は1万円、配偶者の場合は5000円）を持っていってもらい（事前に事務局に連絡）。費用は後日事務局に請求する。
- ④ それ以外の場合は、あまりおそくならない限り事務局から香典を郵送する。

☆ 年会費は1000円です。1ページ目の口座に。